

# 校名：鹿児島大学教育学部附属特別支援学校

所在地：〒890-0005 鹿児島市下伊敷1丁目10-1 電話番号：099-224-6257

記載日：平成28年 5月19日 記載者：山之口 和孝 記載者役職：教頭

## 貴校の校風、おおまかな特色について：

- 1 昭和55年(創立35周年)開校、知的障害のある児童生徒を教育する特別支援学校
  - (1) 小学部、中学部、高等部(普通科)を設置、各学部3学級(小学部は複式)
  - (2) 通学時間1時間以内で保護者と居住している児童生徒を対象
- 2 大学との共同研究
  - (1) 2年に1回の公開研究会の実施(平成28年11月 公開予定)
  - (2) 大学教員(障害児学科、教科等)を共同研究者として依頼
  - (3) 大学と連携した免許状更新講習(2講座)の実施
- 3 教育実習等の実施
  - (1) 年3回の教育実習(1免、2免、参加観察実習)の実施
  - (2) 介護等体験の実施(年間約250人の受入)教育学部は必修、他学部の希望者
  - (3) 採用前実習の実施(県に採用された学生対象)
- 4 特別支援教育のセンター的機能の発揮
  - (1) 保育所、幼稚園、小・中・高等学校等への巡回指導、教育相談、講師派遣など
  - (2) スキルアップセミナー、早期教育相談事業における体験学習などの実施
- 5 児童生徒の放課後、卒業後等活動の支援
  - (1) 放課後スポーツ活動としてFSC(附特スポーツクラブ)の実施(ダンス、風船バレー)
  - (2) 卒業後3年までの卒業生を対象とした卒業生クラブの定期的な実施
  - (3) 同窓会の定期的な実施、あゆみ会(市手をつなぐ育成会)への協力

## 貴校の卒業生の活躍状況について：

- ・ 卒業後3年を目安に進路指導担当者を中心にアフターフォローを行っている。
- ・ 毎年8月上旬に卒業生の進路先を職員で分担して訪問し、卒業生の近況について確認している。
- ・ 卒業生クラブや同窓会、あゆみ会(市育成会青年部)と連携、情報交換を行うことで卒業生の動向はほぼ把握できている。

## 貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

- ・ 鹿児島県の四附属学校園の現職教員とOBの懇親会が年に一度開かれる。また、同様に本校の現職教員とOBの懇親会も年に一度開かれている。行政や各学校で管理職として活躍されている先生が非常に多く、会の中で「先輩教師の話」として、たくさんの経験をお持ちの先生から講話をしていただいたり、懇親を深めながら御指導をいただいたりしている。それぞれの会の名簿を確認することで、会員の動向を知ることができる。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

## 1 センターの機能の充実

幼稚園、保育所の巡回相談について近隣の16の園を対象に実施している。平成27年度は、71回の巡回相談、151件のケース相談、55回の職員研修やケース会議、15人の保護者を対象とした教育相談を実施した。その他にも学校見学会や早期教育相談事業における体験入学、幼稚園、保育所、小・中学校の教職員を対象としたスキルアップセミナーの開催、インクルーシブ教育システム構築モデル事業の実施など積極的な取組を行っている。



## 2 研究校としての先進的な取り組み

2年に1回の公開研究会をはじめとして、先進的な取組を全国に広く発信している。その成果の一つとして、平成25年2月にジアース教育新社から「特別支援教育の学習指導案と授業研究」を出版した。発売当初はamazonの特別支援教育関係部門ではベストセラーとなるなど多くの方々に購入していただき、現在第5刷まで増刷されている。この本で紹介した付箋紙を使った授業研究のスタイルは、県立の特別支援学校でも取り組み始めるなど、本校の取組が他校でも活かされはじめている。

また、平成26年度から国立特別支援教育総合研究所の研究協力校として『知的障害教育における組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策に関する研究—特別支援学校（知的障害）の実践事例を踏まえた検討を通じて—』の研究に参加し、引き続き平成27年度、28年度も『知的障害教育における「育成すべき資質・能力」を踏まえた教育課程の在り方—アクティブ・ラーニングを活用した各教科の目標・内容・方法・学習評価の一体化』の研究にも参加している。このような研究を通して、県内だけでなく、全国に向けて本校の研究を中心とした取組を積極的に発信している。



### 3 地域への啓発

本校では、毎年、学習発表や中・高等部の作業学習による製品の展示販売活動とPTAによるバザーを合同で行う「ふとくフェスティバル」を実施している。これは、活動を通して、交流校や近隣の学校、地域の人々など多くのふれあいの機会を設け、お互いの友好を深めたり、関わりを広げたりすることを目的としており、事前にポスターやチラシ、マスメディアを通して地域を含む鹿児島県下に告知している。午前中に学習発表、午後から作業学習等で作成した製品を販売する。また、物品バザーや食バザーは、PTAが主体となって実施している。

平成27年度は、天気にも恵まれ、多くの来校者がある中で「ふとくフェスティバル」を実施することができた。児童生徒たちは、「ふとくフェスティバル」に対する期待感を高めつつ、当日必要となる客とのやり取り方法や金銭の受け渡し方法などの学習に取り組んできたり、製品を丁寧に製作し販売準備をしたりしながら、事前学習に取り組んできた。それらの学習の成果を十分に発揮することができた。また、地域の方々が多く来校し、地域の方々とも十分に関わることができ、理解・啓発の面でもよかったと考える。保護者主体で行われるPTAバザーにおいては、業者委託の品物も増え、保護者も余裕をもって地域の方と交流を図ったり、卒業生のいる福祉施設の製品を買いながら施設に関する質問をしたりと積極的に活動していた。

本校のことを地域の方々にも知ってもらおう交流の場となったとともに、学校卒業後の具体的な姿をイメージするきっかけもつかむことができたようであった。事前の新聞による告知や大学広報による周知、テレビ局による取材など、効果的であった。特に附属小学校PTAによる販売協力や鹿児島大学のマスコットキャラクター「さっつん」によるPR活動、教育学部の学生によるボランティア活動、今年度は日程の都合で実現しなかったが、例年附属中学校生徒会によるボランティア活動が行われるなど、大学や附属学校園との連携、交流も積極的に行われている。

地域の方々にもイベントとして定着してきており、近隣の郵便局の方が毎年高等部窯業班の干支の置物を購入してくださって、局内に飾ってくださったり、「〇〇はまだ残っていますか。」などお目当ての商品を買いに来てくださったりする方も増えている。今後も積極的に取組を発信していくことで、本校及び特別支援教育や福祉についての理解・啓発について努めていきたいと考える。



## 地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

第一に地域の研究の拠点校としての存在が挙げられる。公開研究会の実施や書籍の発行、中央の研究機関との研究協力など先進的な研究に積極的に取り組み、発信している。

第二に教育実習校としての存在が挙げられる。触れ合い実習（介護等体験）に年間およそ250人、1免実習、2免実習におよそ6～70人の学生が毎年実習に訪れる。これからの鹿児島県の教育を担っていく教員を目指す学生たちに、特別支援教育への理解を深めることで、教員としての資質向上を図ることができる。そして、そのことが鹿児島県の教育の一層の充実につながると考える。

第三に地域の特別支援教育のセンター的役割としての存在が挙げられる。実績については前述のとおりであるが、割り当て地域以外の園からも本校のホームページなどを見て相談依頼が多数あり、担当地域の特別支援学校につないでいる。年に2回実施している学校見学会には、合わせて100人以上の来校者があり、同時に行われる体験入学は、定員を超える申し込みがあり、お断りさせていただく方も出るほどである。未就学児対象の早期教育相談事業における体験入学も同様で、本校の教育に対する関心の高さが伺われる。

## 附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

鹿児島県の特別支援教育の充実、発展という視点で本校の取組から附属学校及び本校の存在意義について考えてみたい。

まず、前述のとおり教育実習をとおして、これから鹿児島県で教員になろうとしている学生の育成を図ったり、国の動向に合わせた先進的な研究を公開研究会や書籍の発行等をとおして伝えたりするという将来の鹿児島県の特別支援教育の充実、発展に向けた取組。

また、スキルアップセミナーや免許状更新講習の開設、各地で開かれる研修会への講師としての協力、本校から転出していく若手の教員は、その後研修のチーフや教務主任など学校運営の中心的立場で活躍していること、中堅教員は教育行政において指導的な立場として活躍し、その後、特別支援学校の教頭、校長として赴任していくという現在の鹿児島県の特別教育の充実、発展に向けた取組（関連する行政職、県内特別支援学校の管理職の8割から9割が本校のOB）。

さらに、それらの要職を務めあげたOBの方々と同窓会や現職教員とOBの懇親会をとおして、特別支援教育の歴史を学ぶことができるとともに、本校の教育に対して様々な示唆を得ることができる諸先輩方とのつながり、連携の取組。

このように、本校の取組が県の特別支援教育の過去から現在、将来の充実、発展に大きく寄与しており、本校の存在が県の特別支援教育の充実、発展には不可欠な存在であるということが言える。